

宮崎汎会員が見た世界の旅

第1部映画編第16話・映画「カサブランカ」を訪ねて モロッコ王国

モロッコを知らなくも映画「カサブランカ」を知っている人は多い。カサブランカとはスペイン語で“白い家”である。青い海を背景に白を基調とする家並みが美しく映える魅力いっぱいの街である。そして人口三百万人余のモロッコ王国随一の経済・商業の大都会である。

映画カサブランカは、モロッコで撮影されたと思っている人が多いようだが、実は1942年アメリカのハリウッドで全て製作され、モロッコでは撮影されていないのである。

物語は第2次大戦の最中、ハンフリー・ボガード演じる主人公リックスと、ナチの手が伸びるパリから逃れてきた元恋人、イングリット・バーグマンが夫と自由圏へ脱出するためにカサブランカを舞台に葛藤するというストーリーである。

リックスが経営するバーに、切なく流れる“*As Time Goes By*”のメロディーや“君の瞳に乾杯”といった気障な名セリフで映画「カサブランカ」は一世を風靡した。今に至るもファンは多い。カサブランカにリックスカフェがあることをご存知だろうか。オーナーはかつてモロッコに駐在していたアメリカの女性外交官が映画に魅せられ、ハンフリー・ボガードが経営していた「リックスカフェ」を模してオープンしたものである。以来モロッコを訪れる人たちや映画ファンが旅のひと時を過ごす憩いの場となっている。



カサブランカのリックスカフェ

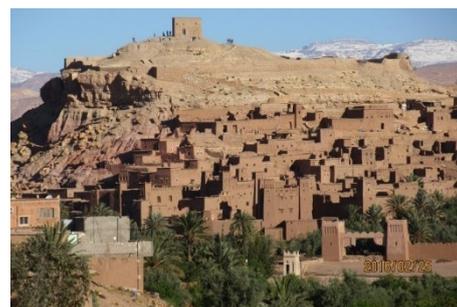
2016年、日本とモロッコ王国が国交樹立60周年を迎えた。日本モロッコ協会がこれを祝い、モロッコへ親善ミッションを送った。メンバーの一人が妙齢の夫人とともに成田へボルサリーノとトレンチコートの粋な出で立ちで颯爽と現れ人目を引いた。彼はカサブランカのリックスカフェでハンフリー・ボガードばりのこの格好で一杯飲むのが長年の夢だったと明かした。余談ながらリックスカフェのオーナーは、2017年夏都内のデパートでモロッコフェアが催されたときに来日し、その一角にリックスカフェを設け、モロッコ大使はじめ日本のファンも大勢詰めかけ人気を博した。

ところでモロッコを舞台に制作された映画は沢山あるが、よく知られているものをいくつか列挙してみると、脚線美のマレーネ・ディートリッヒが主演女優を務めた「モロッコ」、ドリスディが歌った主題歌ケセラセラが世界的に大ヒットした「知り過ぎていた男」、イギリスの長編映画「アラ



リックスカフェのオーナー

ビアのロレンス」はモロッコを代表するカスバとして名高いアイトベンハットウ（世界遺産）を舞台とした。その他「ナイルの宝石」「グラディエーター」「アレキサンダー」「ソドムとゴモラ」など数えきれないほどある。



世界遺産アイトベンハットウ



サハラ砂漠の夜明け アラビアのロレンスを気どって

モロッコ政府は近年映画産業振興に力を入れている。大きな映画スタジオがいくつもつくられ、中には世界最大級の敷地を持つアトラス・コーポレーション・スタジオなど欧米は勿論いろいろな国がモロッコのスタジオを利用している。撮影所の集中するワルザザードは、今や映画産業の基地でアトラス山脈を指呼の間に臨む風光明媚な自然の中にある。



ワルザザード郊外にある映画スタジオ正門

またワルザザードは、カスバが連なる街道の一端にあり、スタジオのみならず5つ星の立派なホテルが完備し、ロケに来た世界的に名高い俳優たちが大勢利用している。サハラ砂漠にも近く観光基地としても売り出しているところでもある。



豪華ホテル”ベルベルパレス“



雪をまとうアトラス山脈

スタジオ見学をする機会に恵まれた。雪を抱くアトラス山脈が聳え地平線まで見晴るかす広大な敷地の中に古代エジプトの神殿、中国の寺院、モロッコの村などの映画セットがいくつも作られつい本物と見まごうが裏へ廻ると全て張りぼてである。広場に007のジェット機や、ジェームス・ボンドが乗り回したスーパーカーが無造作においてある。近寄るといずれも噴き出してしまいそうなちゃちな張りぼてである。世界的なヒット作品がこんなものを使っていたのか、しかし良く出来ているなどと思いつつ映画づくりの一端をかいまみた。



エジプト映画のセット



007 の撮影に使われた戦闘機



007 のスーパーカー

モロッコがなぜ映画撮影のメッカになりつつあるのかその理由はいくつもあろう。まず天候が年間を通し安定していることが挙げられる。天候に左右される撮影は俳優を拘束し大勢のスタッフを待機させるなど膨大なお金がかかる。このため安定した天候は、即スケジュール通りの撮影に結び付く重要な条件で、加えてモロッコは政情が極めて安定している、土地が広大である、人件費が安いなど映画づくりの好条件がそろっているのだそうだ。

モロッコは王国で日本の皇室とも親交がある。日いずる国日本、入日の国モロッコ両国には多くの共通点がある。政情が安定し国民は穏やかで古都あり砂漠あり遺跡ありと観光資源は豊富にある。一方国を挙げての工業化への歩みとともにインフラ整備が急速に進みアフリカ経済圏へのゲートウェイとして世界中から熱い視線をあびているのである。(2018年)

補遺) 上記を見た元モロッコ王国特命全権大使であった広瀬晴子氏から映画「カサブランカ」の背景の物語を聞いた。同氏にお願いしその概略をまとめていただいた。以下は同氏からいただいた文面である。

映画「カサブランカ」その背景

イングリッド・バーグマンとハンフリー・ボガードの共演による映画「カサブランカ」の背景を調べて見ると意外な側面が浮き上がってきます。日本とも関係があるのです。

この映画でバーグマン演ずるイルザと夫ラズロ(反ナチレジスタンスの闘士で最後にバーグマンとアメリカへと飛び立つ)のモデルとなったのは、日本人の母を持つオーストリアの貴族リヒアルト・クーデンホーフ・カレルギーとその妻でオーストリアの舞台女優イダといわれています。リヒアルトは後に今日のEUの基となった理念、汎ヨーロッパを説いた人物で映画は二人のアメリカ亡命の実話と大衆小説“だれもがリックの店にやって来る”をミックスして作られたとの事です。

リヒアルトの母は青山みつという日本人で日本に赴任してきたオーストリアの全権公使のクーデンホーフ・カレルギー伯爵と結婚し、夫と共にオーストリアに渡り、二度と日本に帰ることなく一生をオーストリアで過ごした女性です(ゲランの香水のミッコは彼女にちなんで名づけられたという説がありますがこれは違うようです)。

リヒアルトは若くして汎ヨーロッパという本を出版し、汎ヨーロッパ運動を始めたEUの思想的先駆者であったのですが、ナチスは、政権を取るやドイツでの汎ヨーロッパ運動を禁止したのです。そして1938年にナチスがオーストリアに侵攻してくるとクーデンホーフ夫妻はすぐ国を出てスイスやチェコを回り、フランスに活動の拠点を移していたのですが、ナチス・ドイツがフランスに侵攻して来て、1940年にヴィシー政権がドイツに降伏するに至りアメリカを目指したのです。また彼の年上の妻イダはウィーンのブルグ劇場の人気女優だったのですがユダヤ系だったことも大きな理由であったようです。

なぜモロッコのカサブランカ経由かと言うと、モロッコはフランスの保護領ではあるもののナチス・ドイツに占領されていなかったこと、他のフランス領だったアルジェリア、チュニジアと違いフランスのヴィシー政権から要求されたユダヤ人の収容所への送還を拒否していたので彼らは無事アメリカ行きの飛行機に乗ることが出来たのです。

さて、その頃モロッコはどうしていたかと言うと、フランスの保護領という植民地一步手前で王政は保たれたもののフランスの管理下にあったのです。そしてフランスからおとなしいと思われていたスルタン（国王）モハメッド五世は、第二次大戦中もヴィシー政権の求めに応じず、ユダヤ人を収容所に送り出すことはせずと変わらぬ扱いでユダヤ人を保護したのです。そんなこともこの映画の背景にはあるのです。

映画はロマンスが中心ながら、1941年第2次世界大戦に参戦したばかりのアメリカで1942年に作成され、反ナチスのプロパガンダの要素がちりばめられたものです。ちなみに、リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギーは、この映画は好きでなかったそうですが（さもありなん）、大戦後はヨーロッパに戻り汎ヨーロッパ論を広め、ヨーロッパの論壇の有名人になり、各国の政治家達を説得し、会合も企画するなどしてEUの基礎を作ったと言われています。また、鳩山一郎元首相に友愛の思想で大きな影響を与えたともいわれています。息子よりは自分のほうに年の近いイダとの結婚に怒ってリヒャルトを勘当したみつも戦後のリヒャルトの活躍には鼻が高く仲直りをしたそうです。そんな訳で、カサブランカ港の近くにあるリックスカフェは観光客向けに（客は主にアメリカ人と日本人だそうです）最近作られたものです。

また、モロッコはそんな歴史から、イスラエルとは友好的な関係にあり、またパレスティナも支援していて、両者の2国家解決を常に支持しています。最近モロッコはイスラエルとの国交正常化の合意をしましたが、合意に先立ちパレスティナのアッバース議長にも話をしていて大きな問題にはなりませんでした。

そんな背景を知って映画を見ると画面には出てこないモロッコやヨーロッパの世情に思いをはせることが出来るのではと思います。